

## 2022 年度外国語学部 FD 活動報告

(英米学科、スペイン・ラテンアメリカ学科、フランス学科、ドイツ学科、アジア学科)

2022 年度、外国語学部では FD 活動の取り組みとして、FD 研修会を 1 回実施した。

7 月 13 日に開催した「大学の外国語教育に求められること What is required in considering foreign language education in tertiary education」と題する外国語学部主催 FD 研修会（オンライン）において、外国語教育の歴史と変遷を把握するとともに外国語学部の将来像を探るといった目的の下、上智大学の吉田研作名誉教授（日本英語検定協会会長）を講師に招き、日本における明治期以前から戦後に至るまでの英語教育史と、上智大学における外国語教育の変遷について講演して頂いた。全学的な英語運用能力の向上に貢献した取り組みの事例など、学部将来像の構想に資する貴重な知見が得られ、有意義な研修会となった。参加者は 37 名であった。

当初は年 2 回の外国語学部主催 FD 研修会を予定していたが、前年度に引き続き上記 1 回のみを実施するにとどまった。2023 年度は改善できるようにしたい。

各学科の FD 活動の詳細は、以下の通りである。

### 英米学科

#### <当初の計画>

- 1) 学科が管理する LL 施設の有効利用、および TA の効果的な活用方法などを検討する活動を継続していく。
- 2) 学科内ミニ FD の実施も含めて、学科内 FD 活動をさらに充実させる。
- 3) 学科カリキュラムと有機的に結び付けた視点から、長期の派遣留学生数の維持および更なる増加を図る方策の検討を行う。
- 4) 学科必修科目の内容および評価の標準化の努力を継続する。
- 5) 学科の各授業科目をさらに充実したものにするには何が必要か、学科会議などで議論を深めていく。
- 6) 学科運営のための学科内の役割分担の理想的な方法を模索する。

#### <報告>

2022 年度も 2021 年度に引き続き、コロナ禍の影響のため、当初の計画の幾つかは修正を余儀なくされた。そのような状況であったが、以下の FD に関連する活動・議論が行われたことを報告したい。

- 1) **【LL 施設と TA】** 2022 年度は TA として人間文化研究科（言語科学専攻）の英語を母語とする大学院生を起用し、学科内業務の一部を円滑化できた。卒業論文執筆に関連して LL 教室を活用できた。
- 4) **【学科必修科目の内容や評価基準】** 「Academic English A」及び「Academic English B」のそれぞれの科目コーディネーターを中心に、共通テキストの見直し作業などを

行った。

- 5) 【COIL 授業】2022 年度も英米学科の幾つかの科目で COIL を利用した授業が行われた。具体的には、「異文化コミュニケーション」「演習 I」「演習 IV」の科目において実施された。これ以外にも、1 年生は、共通教育の英語科目でも COIL を体験している。
- 6) 【学科内役割分担の模索】学科構成員の全学的ないし学部内役割等を考慮して、学科内での役割分担の効率化を模索し、改善をはかることができた。ただし、不測の対応事項（学務、学生、教員関連等）に学科長が十分関わられるよう、各業務の更なる役割分担が引き続き課題となっている。

また、〈当初の計画〉とはしなかったが、次の項目を実施することができた。

・【推薦入試に関する検討】

学部・学科のアドミッション・ポリシーに鑑み、推薦入試における更なる入学者確保を目指して、過去のデータに基づく推薦入試の再検討を完了することができた。

・【英語教員セミナー】

2022 年 8 月 2 日（火）～ 8 月 3 日（水）[9 時 00 分～15 時 20 分]の 2 日間、100 分授業を 6 コマで、新学習指導要領に基づく実践的アプローチ（A practical approach to implementing the New Course of Study）をテーマに、学科教員の今井隆夫、Anthony Ryan、Robert Cochrane の 3 名と浅野亨三氏（元南山大学外国語学部教授）を加え、4 名が本セミナーを実施した。

・【Oral Interpretation Festival】

2022 年 12 月 17 日 13 時から、第 5 回全国英語オーラルインタープリテーションフェスティバルを開催した。参加校は、愛知県立明和高等学校、名古屋市立向陽高等学校、名古屋市立桜台高等学校、名古屋市立北高等学校、静岡県立静岡商業高等学校、海星高等学校、椙山女学園大学、南山大学の 8 校であった。

【課題】

今年度は、講演会を実施することができなかつたので、次年度は、開催できるようにしたい。

スペイン・ラテンアメリカ学科

- 1) 2022 年度は、2021 年度末に 1 名の教員が定年退職し、1 名の新任教員を迎えた。新任教員に対しては、学科内で適切なサポートを行い、スムーズに学科業務に慣れてもらえるよう、学科全体で心がけた。新任教員は、慣れない環境の中、海外フィールドワークの引率をはじめ、国際化推進事業等でおおいに貢献した。
- 2) ラテンアメリカ研究センターと連携を密にし、国内外の優れた研究者を招いて講演会・研究会を開催した。コロナ禍が収まりきっていなかったこともあり、当初計画し

た規模での講演会は実施できなかったが、駐日チリ大使の講演会などいくつかの重要なイベントの実施ができた。

- 3) 国内外のカトリック大学との教育・研究面での協力・交流関係をさらに広げることを目指し、本学科と上智大学外国語学部イスパニア語学科の間で海外フィールドワーク B (コロンビア) のオンライン版を共同で科目運営した。本学のラテンアメリカ研究センターと上智大学のイベロアメリカ研究所・ヨーロッパ研究所との交流を通じた連携が可能であるかどうかの検討を引き続き進める。また、コロナ禍のため 2020 年度より中断している、教員の相互訪問による輔仁大学 (台湾) との交流の再開もできなかった。
- 4) 学科の教育指導冊子 *Un, dos, tres al español* は、今年度は発行には至らなかった。2023 年においては pdf 版での発行を目指す。今後も加筆修正を行いながら、内容のアップデートを進める。
- 5) 学科必修スペイン語科目、あるいは、その他の言語科目については、言語科目コーディネーターを中心に、運営上の微調整を行った。言語科目コーディネーターを中心として、ネイティブ教員に対しては、日常的に意見交換の機会を設けている。また 2023 年度に向けて学科の会話科目担当者を集めてオンラインで意見交換を行った。2023 年度はこのような機会の範囲をより広くできないか引き続き検討する。
- 6) 外国語検定試験 (DELE や西検) の受験状況に関する学科学生へのアンケートを引き続き実施し、受験・取得状況を把握するとともに、積極的な受験を推奨した。2023 年度のアンケート実施はマークシート方式とする予定である。
- 7) 学科選択必修科目の履修方法など、カリキュラムの見直しを行った。具体的には、3・4 年生で、特殊研究科目など、より高度な科目を必ず履修しなければならないようにすることで、「広く浅く」だけではなく、自分の興味ある分野について「狭く深く」掘り下げ、専門性を高められるようにした。
- 8) 「海外フィールドワーク B」(メキシコ) を 2019 年度以来 3 年ぶりに再開できた。また、2021 年度に、上智大学外国語学部イスパニア語学科とジョイントでオンライン実施した「海外フィールドワーク B」(コロンビア) も、2022 年度も同様の形で実施した。スペインでの「海外フィールドワーク A」についても、2021 年度はオンラインで実施したが、2022 年度は現地での実施ができた。
- 9) 学外におけるスペイン語やポルトガル語のスピーチコンテストについて、学生への周知を図ったが、参加したという声は確認できなかった。引き続き周知に努めたい。
- 10) スペイン語劇について、2022 年度は 3 年ぶりに実地での上演が可能となった。2023 年度に向けて、古典を取り入れながら、更なる発展を目指す。

#### フランス学科

- 1) 2022 年度より FLEC 担当の特別任用枠がなくなり、7 人体制での学科運営となった。

不測の事態に対処するため、学科内において定期的にミーティングを開催し、カリキュラムおよび授業運営に問題がないか検証した。また、今年度より従来の専攻別入試を廃止して2年次から専攻を分けることになった。12月に学生の希望を聞き専攻分けを行ったが、文化専攻の方に希望者が多くなり人数の偏りが生じる結果となった。

- 2) 履修ガイダンスおよび学び方講座の開催、オフィスアワーの設置、学科ウェブサイトやSNSの充実などを通じて学生の履修指導、留学支援、学習支援を行った。
- 3) 新カリキュラムの海外フィールドワークは、新型コロナウイルス感染症の状況を勘案し、昨年度同様に第2クォーターにおける実施は断念し、代替科目として「フランス語ワークショップ」のクラスを増設した。リヨン大学とのあいだでwebを用いた遠隔授業を計画し学生に打診したが、希望者が少なかったために実施しなかった。その後感染症の状況が改善したため、改めて希望者を募り2023年2月から3月にかけてリヨン大学で海外フィールドワークを実施した。
- 4) フランス語教育促進のための学生によるフランス語劇は12月に上演を行った。また、京都外国語大学主催による全日本学生フランス語プレゼンテーション大会に参加する本学科生2名のための指導を行った。
- 5) フランス語教育の効果を測定し、その結果をさらに教育に活かすため、実用フランス語技能検定やTCFなどの外部語学試験の団体受験を推奨した。
- 6) 学科のFacebookの更新およびオープンキャンパスや高校における模擬授業などにおいて広報活動の活性化にも努めた。さらに科研費間接経費を用いて学科作成webpageを全面的に更新することになった。

#### ドイツ学科

- 1) ドイツ語教育の質および教員の資質向上のため、主に外国語科目を担当する教員を中心として、定期的に授業の進捗などについて情報共有・意見交換を行うことで、教員間の密接な連携を図った。その連携には学科専任教員だけでなく、外国語教育センター所属の教員も加わり、学生の学習状況全体に目配りが届くよう努めた。
- 2) 海外フィールドワーク不開講にともない2年生を対象に、「海外オンライン語学講座」としてドイツの大学機関が提供する語学講座を受講させ、本学の科目との代替単位認定を行った。これにより、学生の学びの選択肢を増やした。学生も普段と異なる教員や受講生とオンラインで繋がり、多くの刺激を得ることができた。また、学科の授業内でCOIL型授業も展開されており、その点でも国際化推進を図った。
- 3) ドイツ学科主催講演会（ヨーロッパ研究センターとの共催）として、以下の講演会・レクチャーコンサートを開催した。①2022年5月20日「ドイツ映画、越境と分断のまなざし」（講師：白井史人）②2022年10月25日「謎に包まれたロマ族：その歴史的背景と今後」（講師：Josko Kozic）③2022年12月9日「ベートーヴェンの弦楽

四重奏曲：エウレカ・カルテットを迎えて」（演奏：エウレカ・カルテット、案内：畑野小百合）。どの講演会も内容的に充実しており、学生はもとより教員にとっても新たな知見を得る機会となった。また、レクチャーコンサートは新規の試みであったが、学内からの反響も大きく、実り多い企画となった。

- 4) 学科ホームページを通じて、学科独自の情報発信に努めた。特に今年度は、留学体験談やインターンシップ経験談、学生の活躍などを多く掲載することができ、ドイツ学科を受験しようとしている高校生へのアピールとなっただけでなく、入試での学科志願者増に繋がった。
- 5) 高校での模擬授業実施に関しては、様々な新しい試みを行った。詳細は以下の通り。
  - ①オンラインでの模擬授業実施の際に、ドイツ学科生に参加してもらった。これにより、ドイツ学科の雰囲気や学生目線で伝えてもらい、高校生にドイツ学科での学びの素晴らしさを伝えてもらった。
  - ②対面での模擬授業の際には、ドイツ学科生にパワーポイントを作成してもらい、模擬授業の際に活用した。これにより、学生目線での学科の学びを伝えることに成功した。
  - ③吹上ホールで模擬ゼミを開講し、高校生にも実際にそのゼミに参加してもらった。これにより、大学での学びを体験してもらう機会を作ることができた。
- 6) 学生の勉学の支援・成果発表の場として、まずはドイツ語劇であるが、これに関しては8月末から9月にかけて非常勤講師の丸山達也氏による「ドイツ語演劇研究」の最終授業において成果発表会を行った。この他、9月に半田赤レンガ建物で開催されたドイツ・フェスティバルでは、中屋ゼミで一般公開形式のゼミ発表会を行い、ゼミでの研究成果を一般にも還元することができた。またドイツ・フェスティバルには多くの学科生がボランティアで参加し、地域貢献にも繋がった。10月に開催された「第2回ドイツ語教育部会アイデア賞コンテスト」では、太田ゼミの複数の学生や学科卒業生が入賞を果たした。12月に南山大学で開催された第22回名古屋圏国公立大学インターゼミナール（総参加者数約80名）では、中屋ゼミ生7名が参加した。各自ドイツ・EU 経済に関する卒業研究に向けた内容を発表し、他大学学生と活発な議論を行った。なお、これまで毎年開かれていた「ドイツ語弁論大会・オーラルインタープリテーション大会」については、開催形式の見直しを検討するために、一旦開催を見送った。
- 7) ドイツ語能力検定試験は、各自申請して受験した。合格人数は以下の通り。A1 レベル：1名。B1 レベル：5名。B1 レベル（一部）：4名。B2 レベル（一部）：2名。独検3級：3名。
- 8) Kreis やドイツ文化研究会などの課外活動への支援を継続した。
- 9) キャリア教育の一環として、1年生を対象とする学び方講座をQ1に、学科生全員を対象とするキャリア入門講座をQ3に、それぞれオンラインで実施した。またVW（フォルクスワーゲン）の豊橋工場見学会も実施し、学生のキャリア教育の充実を図った。

VWでの長期インターンシップにも継続的に学生が参加した。

#### アジア学科

- 1) 学科必修科目とりわけ外国語科目と演習科目について、前年度から継続して学科会議や担当者ミーティングの場でその運用状況を報告するとともに、評価できる点と改善すべき点および受講生の学習状況について意見交換をおこなった。
- 2) 学習成果測定の試みとして作成した卒業論文評価用のルーブリックを学科会議で点検を重ねつつ、卒業論文判定会議において活用した。
- 3) 海外フィールドワークはコロナ感染状況の改善がみられないために 2 科目とも不開講のやむなきに至った。これにともない参加できなかった 2 年生を主な対象として、東アジア専攻では輔仁大学の学生と SNS で交流するプログラムを実施した。東南アジア専攻では「東南アジアの歴史と社会」の授業において外部の講師による講演会を開き、イスラームに関する講義とともに礼拝用の服装の着用など、実体験を学生に提供した。
- 4) 学科教員間および学科教員と非常勤講師の間で連携をとって、授業における学生の様子を随時把握しながら、Zoom やメール、SNS を活用するなどして必要に応じて学生指導をおこなった。また、授業運営についても学科教員と非常勤講師の間で随時連絡をとって意見交換をおこなった。
- 5) 学科作成ホームページに、今年度も幾つかの学科科目を紹介する欄を追加した。そこに掲載するために受講生に依頼した紹介文をもとに、当該科目に対する学生の評価を確認した。また、学科公式 Instagram を開設しその運用を開始した。
- 6) 2020 年度から中止としたインドネシア語スピーチコンテストは、残念ながら 2022 年度も中止せざるをえなかった。
- 7) 中国・台湾およびインドネシアへの国費留学希望者に対する支援として、個別相談への対応や国際センターの業務への協力を継続しておこなった。
- 8) 上記 3) でも触れたが、海外フィールドワーク A/B の不開講にともない参加できなかった 2 年生を主な対象として、東アジア専攻では輔仁大学の学生と SNS で交流するプログラムを 2022 年度も続けて実施した。グループ単位や個別での交流に加えて学科演習科目での発表・意見交換という形での交流もおこなった。東南アジア専攻ではジャカルタの BINUS 大学の教員・学生と本学科の教員・学生(3 年生)の交流を 2021 年度に続いておこなった。
- 9) 2023 年度海外フィールドワーク A の実施に向けて輔仁大学のスタッフと協議を行った。
- 10) FA.com など在学生の課外活動への支援を継続した。
- 11) キャリア教育の一環として、1 年生を対象とする学び方講座を Q1 に、2 年生を対象とするキャリア入門講座を Q3 にそれぞれオンラインで実施した。 以上